

大藪寿一著「あいりん人生追跡調査誌」についての  
基本的批判、及び釜ヶ崎に視点を置いての読後感

(一)

まず、大藪寿一の「あいりん人生

追跡調査誌」について、まず、大藪寿一

が、釜ヶ崎にいて、その生活の状況を

述

「この世では、不安定な日雇労働者

のまじりであり、社会問題の一つである。

この「あいりん」社会問題、地域を調査させて

ためには、不安定な日雇労働者を

### 今宮鹿之介

「あいりん」社会問題、地域を調査させて

には、まず、大藪寿一の「あいりん人生追跡調査誌」について、

まず、大藪寿一の「あいりん人生追跡調査誌」について、

まず、大藪寿一の「あいりん人生追跡調査誌」について、

まず、大藪寿一の「あいりん人生追跡調査誌」について、

まず、大藪寿一の「あいりん人生追跡調査誌」について、

まず、大藪寿一の「あいりん人生追跡調査誌」について、

まず、大藪寿一の「あいりん人生追跡調査誌」について、

らう。

大藪寿一の「あいりん」社会問題、地域を調査させて

が非常に理解に難いので、そのことを  
をシて、だけ説明させてもらう。

この二つの部分に出てくる「基本的  
視点」という言葉は理解に難い。こ  
の言葉は、普通は「基本的観念」考  
え方、考え方、認識、思想」という言  
葉を使うところ。

「視点」とは「視る地点」。「視る位  
置」のことである。もちろん人、その  
ほか動物の方向性を指す。更に広  
く、社会に於ける視る位置は「見  
る者の社会的立場」等という概念的

なまじりかたで使われる。い  
ずれにしても要は「視点」、「位置」  
に關してはわかる。

主に文学の創作方法に關して使わ  
れることが多いのでその例を考えた  
ら解りやすいだろう。例えば「小説  
家の視点」、「小説の登場人物の視点」  
映画に於ける「カメラの位置」。二  
重窓の「カメラ、アングル」。画家  
の「視野」は「視点」があつて存在  
する。

この論で「基本的視点」という

「基本的視点」の意図は理解に難  
い。

だから「視点」といふ三語に  
引がかつて居ては誤解進み事が出  
来ないので、「基本的視点」という  
言葉は「基本的考え方」という意味  
に解して語を進める。

大藪氏の主張を、問題整理するこ  
とになる。  
(1) 釜ヶ崎（この地区）は日雇労働  
者のまちであり、社会問題地域であ

(1) 社会問題地域（釜ヶ崎）は解決  
しなければいけない。故に日雇労働  
は解消しなければいけない。

これが大藪氏の「基本的考え方」  
であり、「根本的解決」方法であり  
「最終目標」である。

これに対する私の考えは、(1)には  
異議はない。(2)には異議がある。以  
下に私の基本的観念を批判的にのべ  
る。

私の考えでは「日雇生活」は日

本人の普通の生活様式、生活様式の  
一つである。それは日本人としては  
人あたりまえの生活様式である。

我が民族に於いて、このような生活  
様式がかくも永い間、多く存在する  
のは、民族の歴史上に伝統的文化的  
な、なんらかの理由がある筈だと思  
う。

目を金ヶ崎だけに向ければ、「問  
題地域」だけれども、日本人の生活  
様式、生活様式の問題として見れば、  
日本国中津々浦々にまで日雇生活者

が居るのに向つてだろう。この問題  
は民族共同の問題である。

もしかしたら、日雇生活者こそが  
我が民族の伝統文化を創り上げて来  
た人達であり、本質的日本人、正統  
的日本人であるかも知れないのだ。

私達日本人は自分達が思っている  
程には日本人について、その歴史を  
知っているのではない。例えば何者  
がこの列島の原住民、先住民である  
かという問題なども知らないし、  
又、それが現実の生活や文化の問題

として研究されてはいない。

「日雇生活者」の問題は、それらの  
問題も含めて、民俗学、民族学、文  
化人類学、考古学等、或るも動員し  
て解明にあたらしなければいけな問題  
である。

日雇生活者の生活、生活様式を日  
本人の普通の生活、生活様式のひと  
つしという考えの上に立つて、その  
生活、生活条件が向上するように考  
えを進めなければいけない。

そうでなければ、新しい差別を作  
りだすことになるだろう。

「日雇生活は解消されなければいけ  
ない。彼らが沢山居る金ヶ崎は解消  
しなければいけないし——等という  
否定を前提とした発想では差別を増  
幅する。そのことは私には、説明不  
要の論理帰結に思われる。

## (二)

「ブレイク」者。このモンドコロが目  
に入らぬか——という有名なセリ  
フがあるけれども、大勢氏にも「ブ

しイ者！この旗ジルシが目に入らぬが！と言いたい者が多いと思う。  
「この旗ジルシ」とは、今日の金ヶ崎に於いて、バある人達が、その政治的信条、宗教的信条、社会的信条を記して、共通してかかざる「金ヶ崎解放」の旗ジルシである。  
「解放」の旗に対して、「金ヶ崎解放」の旗を掲ぐだすのは「ブレイ者」のやることである。

もっとも、論文全体から受ける感じでは、大藪氏が不用意に言葉を使

っているだけかも知れない。しかし、このように、あんなに言葉遣いが多い文章を読ませられれば、やはり「シルハシヤス」をいふ、額に汗して学々と地を這うごとく生きる者を、ただに多くのコトバを使ふことによつてのみ支配しようとする者の意気を感じないではおれないのである。

### (三)

ある研究会のほうに「大藪論文によつて、金ヶ崎の歴史的形過程を

学んだ」という語が書いてあった。しかし、論文のどこを探して「歴史的形過程」などという、もののものしい言葉を使わなければならない部分はない。

### (四)

大藪氏のサンプルに抽出の手続きにも異議がある。

まず、日雇生活者二十名のサンプルをどのような手続きによつて抽出したかについて大藪氏は書いていない。読む者はそれを勝手に想像する

しかない。論文を読んだ者の多くは「お更相」に出入りしている労働者から取った人だろうと言っているが、それにしては「お更相」に出入りする者は多いのだから、その中からどのようにに選んだのかわからない。人の相の良い人を選んだのか、今この人なら少しぐらい失礼なことを言つてもアッなぐらゆる事も無さそうだし、質問しても返事をしてもしえそつた人だから選んだというのか、何んらかの基準があつた筈だ。にもかかわ